

報



會

會 岳 山 本 日

95

月 七 年 五 十 和 昭

C・G・ブルースの死を悼む

吉 澤 一 郎

ヒマラヤ探検史上に燦然たる光輝を放つてゐたブルースも、遂に倫敦の自宅に於て此の世を去つた。それは昨年七月十三日の事で、享年は七十三歳である。此の前のアルバインジャーナルに出てゐたならば、今頃は將軍に關する全般的な事が、紹介出来てゐたのであるが、同誌の編輯者も餘程慎重を期してゐると見えて、彼に關するイン・メモリアムは次號に廻すと書いてあつた。在京のジョン・モリス氏に依頼した所、非常に親しい間柄だったので色々書きたい事もあるが、正確な材料が手許にないからA・Jに出てからそれを見参考にして、自分の意見を述べて見たいと云つてゐた。仍で、私は取敢えず昨年「瑞西山岳會誌八月號」により、一應の報告をして置かふと思ふ。

實際ヒマラヤに少しでも關心を持つてゐたものには、ブルースの存在は大きく感じられてゐた事であらう。その彼の死こそは、群星中に特異の光を放つてゐた巨星の、卒然たる消失にも等しいものがあつたと思ふ。

彼はウェイルズの大地主アバードア卿の末子として生れ、幼年時代を其の山河の跋渉に過してゐた。學校にあつての彼は、唯の學問よりも實際的な方面及び各種の競技を好んだ。最も熱心だつたのは地理學殊に印度のそれであつて、軍籍に身を置いた二年目に、彼は自ら進んで印度駐屯軍に赴任する事となつた。此の赴任前の休暇を瑞西の山地に過した事が、ヒマラヤに對する彼の探検慾を、一層決定的ならしめたのである。彼は常に激烈たる競技者であり、優れた拳闘家であり劍客であり、又狩獵家であり、更に生來の釣り好きでもあつた。然し彼の最も傾倒してゐたものが山岳であつた事は、今更云ふまでもない。

印度へ赴くと、彼は間もなくグルカ聯隊に編入されたが、瞬く間にグルカの言葉を得し、更にその天才的な語學力は、印度にある凡ゆる土語を征服してしまつたのである。此の知識並びに登山家としての名聲は、遂にかのマルティン・コンウェイ等の歴史的カラコラム遠征への招聘、参加となつたのである。その遠征隊の中に、シュダイグアイゼンの發明者として有名なエッケンシュタインや、優れた案内者たるマチャス・ツールブリッケン等の居た事は既に御承知の通りである。此の遠征は、其の後の同様な企てに對する基礎を作つたといふ點に於て全く先驅的なものであつて、その詳細はブルース自身の「Twenty Years in the Himalaya」もしくは「Climbing and Exploration in the Karakoram-Himalaya」並びにエッケンシュタインの「The Karakoram and Kashmir」の中に述べられてゐる。

一八九四年、結婚のために一度倫敦へ歸つたが、例のマンメリイが不慮の最後を遂げた一八九五年のナンガ・バルバット行の準備をなしたのは此の時であつた。

一八九五年から一九一四年に至る間、彼はカシミール、クマオン、ガールワール等への遠征を屢々行ひ、一度は瑞西へも遊んだ事があつた。一九〇六年、エヴェレストへの最初の遠征が企てられた時、彼はロングスタッフやマムそれに案内者としてクルマイエルのプロッシュレル兄弟並びにモリッツ・インダービネン等と共にその隊員となつたが、總ての準備が整へられた最後の瞬間に、西藏への入國が拒絶されて來たので、遂にその事は實現されずに終つてしまつた。然しその代りとして、かの大規模なガールワール遠征が行はれる事となつたのである。ブルースは、ロングスタッフがトリズルに輝かしい初登頂をなした二、三日前に膝を負傷してゐたため、遂に其の登攀には加はる事が出来なかつた。

一九一〇年、半年の賜暇を得た彼は、その大部分を瑞西に過し、天候

には餘り恵まれなかつたが、フィンシュテルアルホルンやピーテュホルンに登攀した。印度へ歸へる前、暫らく北ウェイルズの山岳聯隊に勤務した。

其の後カシミールに登山遠征を行つてゐる最中に、一九一四年の世界大戦が勃發し、歸國後、歩工兵大隊の司令官としてガリポリに派遣された。

目 次

- ・C・G・ブルースの死を悼む……………吉澤一郎…一
- ・春の野反池…中村 謙…二
- ・小川山、釜瀬本谷……………小野 幸…三
- ・ポトランド遠征隊の悲劇……………吉阪隆正…四
- ◇圖書紹介……………五
- ◇夏山情報……………六
- ◇山岳部欄・會員通信……………七
- ◇會務報告……………八

た。彼は其處で重傷をうけ、傷兵として後送されたが、一九一六年再び印度に戻り、一九一九年にはアフガン戦争に参加するまでになつてゐたのである。

其の頃から彼の健康は次第に損はれて行き、恢復の見込みなしといふ醫師の宣告により、遂に軍隊の方は退かねばならなくなつてしまつた。

登山の嚴禁は彼には最も痛手であつたらう。然しそれにも拘らず、彼はヒマラヤの前山に登つた。他の醫師に診せた所が、好きな様にせよとの事であつたからである。一、二年の間は夫れでも多少の自重をしてゐたが、彼の生活力の異常さは遂に病魔を克服し、少將になつてゐた彼は一九二二年の第二回エヴェレスト遠征隊の隊長たるべく懇請をうけたのである。マロリーとアーヴィンの二隊員が、八六〇〇米突の高所から忽焉として姿を消した二四年の第三回遠征隊も、最初の間は彼が隊長であつた。マラリヤに罹つたためにノルト



「あら、雪だわ」といふ聲にふと眼を醒すと、眞白な雪が、こん／＼と降りし切つてゐる。前尾根の黒ずんだ雑木林と、芽を吹き出したばかりの柳の新緑とに映えて、得も云はれぬ風情だ。

ン大佐が後を引受けたのである。彼には自負と傲慢とがなかつた。凡ゆる階級の數多くの人々に愛せられたのも、此の美德の故である。

彼は一九二三年より二六年に至る三年間、名譽ある英國山岳會の會長となり、一九三八年には瑞西山岳會の名譽會員と推薦された。

彼の生涯こそは、世の多くの青年に對する一つの靈示であり、總ての登山家にとつてのこよなき模範でもあつた。洵に彼の死こそは、全世界の山岳會にとつての一大損失と云つても、大した過言とはならない事と思ふ。

春の野反池

中村謙

「もう五月にもならうといふのに、これは又何んたることだらう！」

と三人は窓外の時ならぬ雪景色に奇異の眼を見張つた。

藤島さんの「山に忘れたパイプ」を読み、「スキ一の山旅」にある角田さんの寫眞を見て、一度は雪のあるうちにと長い間あこがれてゐた春の野反池へ、

「今ごろスキーが出来るとの知りや」と汽車の中でも、草津へ降り

てからも、行きかふ人々に半ば驚かれ、半ば疑はれ乍ら、遙々尻尾温泉までやつて来て一休みしてゐる我々だつた。

「あはよくば八間山から尾根傳ひに白砂山までのそう」

と仕事からへと／＼になつて歸つて来たばかりの六平さんを要して宿を立つたのが、その晩の十時ごろだ。雪雲はいつしか去つて、空は見渡す限り星で一杯だつた。

「どうだい精進のいゝ人は違ふネ」とばかり、長いスキーをかついでとぼ／＼夜道を通つてゆく。

和光原の部落を通り抜けて四萬への林道を岐つころから、小笹を彩る新雪がどうやら著しく目に付くやうになつた。道はふか／＼した落葉に敷きつめられ、その上に眞白な雪が薄くかぶつてゐて、クッションは至極上々だ。

時々「ビュー／＼」と風の唸る音がする。

「この分ちや、尾根上はひどいでせう……」

と六平は小首をかたげる。

門松を過ぎるころ、だゞ廣大大原が右手うしろに眞白な姿を顯はした。〇君は急に、

「ありや、何んでせう……」

と遙か山の端を指す。見れば將に上らんとする三日月が雲にさへぎられて三角形をなしてゐるではないか

「あんなお月様は初めてだね」と一同は、しばしの間足を留めて

ちつとそれを見守つた。

△一三八三米の北微西と覺しきところから四萬へ行く新道が出来た。指導標には「四萬—十四軒・野反池—二軒・花敷—七軒」と認めてある。雪は段々深く、肩は次第に痛くなつて来た。

「こんなことならスキーをもつて来るんぢやなかつた」と零す聲がする。

「でも角田さんの見えたときは同じ四月の下旬だといふのに粉雪が三尺も積つてゐて、草津からスキーが穿けたといふぢやないか……」

と云ひ乍ら前進する。

いつの間にかブナ立の大楯を過ぎて、愈々これから禿にかゝらうとするところから、漸くスキーが穿けた。そうして辨天山と八間山との鞍部に辿りついたのは午前一時半であつた。

待望の野反池が眞白い雪に覆はれて靜かに横はつてゐるのが、夜目ながらハツキリと見える。ゆつくり休んで……とは思つてもこの寒さと風ではどうにもならない。

「ちつとも雪が残つてゐないぢやないか」

と熊笹の跳梁した尾根筋を一氣に登り出した。新雪に阻まれ、藪にタツクルされ乍らも、長いスキーを擔いで一歩々々登つてゆく。時々ゴーンと風が吹いて来て、スキー諸共吹きとばされそうだ。呼吸は亂れ、肩は益々痛く、道の歩取らないこと夥

しい。

痛はいくつ越しても又前方に新しいのが現はれて来る。斯くして漸くの思ひで八間の頂上に立つたのが午前三時五十分であつた。

「禿から二時間二十分とは！ 随分かゝつたもんだネ」

と互に顔と顔とを見合す。

「やあ！ あそこに白砂山が見える」と〇氏の聲。成程目指す白砂は冬の白装束そのまゝ眞白になつて行手にどつしりと横はつてゐる。とは云ふものゝこれから辿らうといふ尾根筋は、東側は雪庇で、西側は物凄い藪！

「これぢや一寸晝前に行つて来るといふわけにはゆかないヨ」とばかり早くも下へ降りてのびる動議が持ち出される。吹く風は相變らず強く、寒さは愈々厳しい。六平は小指をやられたと騒ぎ出し、私の水筒は栓が抜けず、二人の時計は恰も語り合つたかのやうに揃ひも揃つて同じ時刻で止つてしまつた。

やがて東の空が赤らんで太陽が嚴に昇り出した。

「それ御來光だ！」

とばかり〇氏が寫眞を出せば、シヤッターはヂヤリ／＼とばかり円滑に動くべくもない。

「いやはや春だといふのに、ひどい寒さだナ！」

と一同はいよ／＼白砂山を斷念して下りにかゝる。

雲の中から峰頭を現はす淺間山は

朝日をうけて紅紫に染まり出した。一筋の白い煙を吐いてゐるのが、いつも乍ら懐しい。白根山や横手山にも新雪があつたらしく、頂上附近は樹氷で美しく飾られてゐるのが見える。

近くには辨天山やユビ山や高澤山がなだらかに起伏し、野反池はその真中に静かに横はつてゐる。未だ雪も融けきらぬらしく、水面の出でゐるところはホンノ僅かであつた。

池畔のヒユツチに辿りついて火を焚き乍ら朝食を喫す。六平はひどく眠いらしく暖爐の前で盛んに舟を漕いでゐる。

山岳 第三十五年第二號

原稿締切 九月上旬

御寄稿を待望致してをります。

「危くは見ちやゐられない」とO氏は懸命に介抱する。

しばらくして我々は解けかゝつた池をおつかかなびつくり渡つて奥の方へ行つて見た。處々に腐つた雪や固くなつた雪があるけれども、大體は新雪で中々痛快な滑降を愉しむことが出来た。

八時半ごろになつてから宿に残して居いたM嬢と慶應の學生が二人やつて来た。更に十分ばかり遅れて昨日草津電鐵の中で一緒になつた兄妹の二人連れもやつて来て野反池は急に賑かになつた。

小川山、釜瀬本谷

小野 幸

昭和十五年四月三十日(晴)

金峰山麓金山の有井館を出發したのは六時半を過ぎて了つた。實は未知の谷へ入るのだから五時頃には出たかつたのだがと、ビッチを上げる。近道をしようと天鳥川(下り、そのまゝ獨標一四二一米からなほ北進すべきを、まんまと道を迷ひ天鳥川と本谷との落合に出で了つた。一昨年は上手に通る事の出来たのに残念がる。落葉松はまだほんの新芽をふき出したばかり。黒森よりの瑞牆道を忠實に辿つて、終いに釜瀬本谷の石河原に下りる事が出来た。残雪が豊富、一ヶ所などはアイゼンを取り出すのを横着して、高廻りをした。クレヴァスも出来て居る。終いに下半分に雪にうづもれて居る大瀧の下に着いた。此處には昨秋建てられた人夫小屋が、木の香も新しく佇んで居たので、早午饭の一回目をこの小屋の中でしたゝめた。同行のM君も「この小屋を根拠に小川山をやりたいですね」と云ふ。

この大瀧の源流が即ち釜瀬本谷なのである。我々は此處から瑞牆登山道に別れて本谷へ入る事になつた。この大瀧は右壁を登るより方法がない。朽ちかけた丸太の梯子を利用して瀧の上に出たが、これは丸太が頼

りにならないからアンザイレンした方がよいかと思ふ。上は一枚岩なので靴を脱いで暫らく進む。すぐ伏流になる。地圖に記されぬ分流を過ぎて、右手にガレ場を見るとき間もなく、かすかな踏跡がこの本谷に消うて消えぎえに付けられて居るのに気がついた。そろ／＼雪も出てくるが、悪場といふものはないし、森林に圍まれて居るので眺望もまつたく得られぬ。大瀧から一時間程で再び流れが現はれる。地圖の分流を越えると、左岸に五米程の烏帽子型の立石があつたので烏帽子岩と呼んだ。間もなく石のゴロ／＼したガレ場を右手に迎へた。これを攀れば小川山と瑞牆山の間の尾根に出るはずなのだ。踏跡は消え、残雪は増すので谷の真中を進む。クラストがゆるんでアイゼンも要らぬ。相變らず眺望はないので黙々とのぼる。終いに大瀧からは瀧らしい瀧も見られず、澤もつきてしまつた。残雪は二尺近い。澤をはなれて三十分で石楠の密生帯へ入つた。此處からやつと金峰の五丈石を見る事が出来た。

稜線に出た。かすかな切開きを三分辿ると小川山の三角點の廣場に立つ事が出来た。こんな完全な廻行をした事も嬉しかつた。ほんとうに本谷通りにつめ終へたのだつた。土地の人々にはおどかさされたり、諺言をうけたりして入つたこの釜瀬本谷も、何の悪場もなく廻行出来た

のは多少あつけない氣もした。この晴れ渡つた小川山の頂上から得る百八十度の展望は全く素晴らしい。残雪を装ふた金峰から甲武信へ續く奥秩父主脈、赤岳を盟主とする八ヶ岳、白銀の南アルプスの山々などが美しく取まいて居る。新緑の釜瀬の旅は私達をなごやかな思ひにひたらせてくれた。

かくして小川山へのルートで一番險路であらうと考へられて居たこの釜瀬本谷が、一番手輕なものであることを知つたことも意外であつた。

(時間記録)
金山(六・四五)―釜瀬道(八・二〇)
―大瀧(一〇・〇〇)―三〇―第一分流(二〇・五〇)―ガレ(二一・〇〇)―地圖の分岐、第二(二一・一〇)―烏帽子岩(二二・二〇)―ガレ(二二・四〇)―第三分流、食事(二二・五〇)―第四分流(二二・五〇)―石楠帯(二二・二〇)―小川山頂上(二二・三五)―二二・二〇―瑞牆への分岐(四・〇〇)―大日小屋(五・三〇)―金山(七・二〇)

佐伯榮作君
立山の名案内人、佐伯榮作君は五月卅日、敗血症の爲め郷里芦峯寺で永眠した。享年五十。銀岳、立山群峰の名案内としてその生涯を山に捧げ、幾多の輝かしい登攀をした人であつた。吾々は衷心より冥福を祈つてやまない。

本會圖書室開室日復舊
暫く夜分しか開室してをりませんでした圖書室は、今般理事塚本繁松氏が在室して下さることとなりましたので左記の通り復舊します。會員諸氏の御入室を切望致します。月、水、金 午後六時―九時 火、木、土 午後一時―五時 日曜、祭日、第二木曜は閉室

(四頁下段より)
ベルナチキエウツチはポーランド一の登山家で、四回も極地帯に遠征し、又コーカサスにも行つてゐる。殊に、豫定では今少し上の安全な場所にある事になつてゐたこのテントが、ポーターの病氣の爲め前日の行程がおくれ、致し方なくこゝに張られたもので、翌日には早速上に移される筈であつたといふに至つてはかへすがへすも口惜しい事である。暫て一同は下山し、八月十二日アルモラに、同じく廿三日にはボンバイを出帆し、エチプト、ルーマニアを經由して、レオポールに歸り着いたのは九月十二日であつた。この日の町を獨逸軍の前衛部隊の戦車が通つて行つた。

原文―Première ascension de la Nanda Devi Orientale (7434m.) par la Première Expedition Polonaise a l'Himalaya (1938): par J. Bajak. (La Montagne, Janvier, 1940, C. A. F.)

本會圖書室開室日復舊
暫く夜分しか開室してをりませんでした圖書室は、今般理事塚本繁松氏が在室して下さることとなりましたので左記の通り復舊します。會員諸氏の御入室を切望致します。月、水、金 午後六時―九時 火、木、土 午後一時―五時 日曜、祭日、第二木曜は閉室



劇悲の隊征遠ドローボ

正隆阪吉

ふ豫定であつた。ナンダ・デヴィーはその西峰、即ち最高峰(七八二〇米)が一九三六年に英米合同隊(ティルマン及びオデル)によつて登られた。然るに東峰の方は卅年前、かの有名なT・G・ロングスタフ博士によつて試みられ、南稜の一鞍部(ロングスタフ・コル、約六〇〇〇米)に登られただけである。

ネルは、ロングスタフ・コルの上部に出る尾根を登つたが、荷を運ぶには困難過ぎると断定、以後は直接鞍部にあるクローアール中の小さい尾根による事とした。CⅠは尾根の附根(四九五〇米)に、CⅡはロングスタフ・コル(五九一〇米)に張られた。鞍部の上、稜線は先づ三つのジャンダルムに始まる。岩が脆く急であつたので綱を固定する(八耗のもの約二五〇米)。

一行は夫々CⅡ及びCⅢに悪天の爲め数日間閉ぢ込められたが、再びポーター三人と共にベルナチエウハッチ、クラルネルとブジャクがCⅣに集つて、第三回の攻撃に向つた。七〇〇〇米にてダヴァツェリンを降り、他のポーターをCⅣに下し、CⅤを今度は大きな岩塊の上に建てる。

その後三日間ですつかりテントを畳み、七月九日ベースキャンプはらつてミラム氷河に移る。ミラムには七千米を越える頂三つ、六千米を越えるものは二十近くもあつて、而も未だ一向に試みられてゐない。一行はトリスリ(有名なトリスルに非ず)と稱する七一四〇米及び七〇七〇米の頂を有する山に注意を惹かれた。CⅠ(四九〇〇米)及びCⅡ(五七〇〇米)を建設、先づベルナチエウハッチとブジャクが七〇七〇米峰の南稜を六四〇〇米まで登り、更に、二のテントを張れば登攀の可能なるを知つて下る。

如何に運命の悪戯とはいへ、何故にポーランド人はかくも憂き目を見なければならぬのだらう。フランスマ岳會報(一九四〇年一・二月號)に載せられた報告を読んで、心から同情せずには居られない。こゝにその概略を再録して、彼等の第一回ヒマラヤ遠征隊の輝やかしい功績を讃えんと共に、哀悼の意を表したい。

高度用ポーターは六人で、バルヂング、ニマ、ボクテイ、キバ(以上シエルバ)とダヴァツェリン、インヂュシ(以上ボチア)であつたが、内バルヂング及びインヂュシは佛國カラコラム遠征隊に加つた経験を有つてゐた。

その翌日、風は相變らず強かつたが晴れたので、七時半出發する(氣温零下一度)。第二段の下にてベルナチエウハッチは氣分悪くなり、ダヴァと共にCⅤに引かへす。クラルネルとブジャクは、登路中最も困難とされた第二段の八〇米の岩壁をよぎ、ひる過ぎ漸く最終段の下に到達した。更に岩を登る事一時間、終に最後の雪稜に出る。吹溜つた雪に時々膝まで没しつゝ喘ぎ喘ぎ登る。

七月十八日、ベルナチエウハッチとカルピンスキーは、四人のポーターを連れて、CⅢ(六一五〇米)を懸垂氷河の上に建てる。ポーター達はその日にCⅡに下り、翌日クラルネル、ブジャクと共に同じ徑をCⅢに向つたが、夜の内に氷崩雪にさらはれてCⅢはなくなつてゐた。搜索する事九二日、併し靴及び遺品の僅かを得たに過ぎない。テント地は全く安全な所の様であつたし、雪崩の原因であつたセラツクからは五六百米も離れてゐた。テント地の選定に間違ひのあらう筈はなかつた。カルピンスキーは二五年も夏冬アルプスで鍛えた人であり、アンデスにも遠征してゐる。又

第一回ポーランド、ヒマラヤ遠征隊の隊員は、アダム・カルピンスキー(隊長)、ステファン・ベルナチエウハッチ、ジャクブ・ブジャク博士及びビヤヌスク・クラルネルの四登攀隊員と、J・R・フォイ少佐(ヒマラヤン・クラブ委員、印度當局派遣の聯絡軍醫將校)とである。遠征隊はナンダ・デヴィー東峰(七四三四米)の登攀を目指し、なほ出來うればパンチ・チュリの偵察を行

第一回(三〇〇米)のルートを探察したる後、CⅤ(六九〇〇米)にベルナチエウハッチとクラルネルが入り、同行したポーター二人をCⅣに下した。然るにこの歸路インヂュシの足下より大雪庇(奥行二米)が崩れ、危くダヴァツェリンの確保により墜落はまぬかれ、怪我も大した事はなかつたが、歩行困難なる爲めベースキャンプまで連れて下りる事となつた。代つてカルピンスキーとブジャク

五月十四日、アルモラを立ち、ゴリ・ガンガの谷に出、之よりルワンの谷に入る。五月十五日、四三〇〇米のナンダ・デヴィー東峰の東壁直下の臺地にベース・キャンプを建てる。翌々日、カルピンスキーとクラル

(三頁下段)



紹介書圖

トルキスタンへの旅

ダイクマン著 神近市子譯

岩波新書の一つとして刊行されたものであつて、原書は Journey to Turkistan, by Sir Eric Teichman, Hodder & Stoughton, Ltd., London 1937 (15/-)、「一九三五年特別の使命を帯びて支那本部から支那土耳其斯坦(新疆)へ派遣された」時の紀行である。この使命といふのは烏魯木齊(ウルムチ)に於て新疆省政府と通商上の討議を行ふ事であつた。「イギリスの新疆における關心と云へばインドとの通商、支那土耳其斯坦に於けるインド商人の活動範圍、北西國境の安寧、それから支那沿岸から支那中央アジアに入るイギリス貿易などに關するものであつた。」討議後、同じくこの討議に列席した略什噶爾(カシユガル)駐在の總領事トムソン・グローヴ中佐と共にカシユガルへ赴き、パミールを越へアソグザへ出、インドを通つてイギリス

へ戻つたのである。當時の新疆省の状況は本書の序説並に第十二章に、ウルムチに於ける様子は第七章「烏魯木齊における仕事と餘暇」に記述されてゐる。北京出發は九月十四日。同十八日綏遠から二臺のトラツクに乗つてカシユガルへ向つたのである。ウルムチ滞在は十月末から十一月中旬に及んだが十一月二十九日にカシユガルに到着。十二月九日に出發。それから馬と徒歩によつて「パミール越えの冬旅」(第十章)を行つたのである。一月四日ソグザの首都バルテイツトに着。六日に出發四日の後ギルギツトに到着。カークプライド少佐とそのチャーミングな夫人との歡待を受け、一週間を別に何もせず樂しく休息のうちに過してインドから来る飛行機を待つてゐた。一月十六日——それは五十二回目の誕生日であつたと書かれてゐる——ギルギツトを離陸してデリーに向つた。「カラコラム及びヒマラヤの高峰ラカボシ、ハラモシユ、ナンガ・パルバツトの眩いばかりの壯觀を眺め、チラスの上を越え、インダス河の峽谷を降つて行つた。」そしてその日の夕方七時半にデリーに着陸、この大きな旅行を終つたのであつた。北京をたつてから正に四ヶ月目である。綏遠、カシユガル間、二千五百餘哩の自動車による走破の實旅行日は三十八日である。一日の行程は最小八哩、最大一三九哩であつたが、彼はこれは三十日で行き得るといつて

ゐる。もし駱駝や馬を用ひるとすれば三ヶ月乃至六ヶ月を要する行程である。二臺のうち一臺(中古車の方)は途中クムシユで破損放棄されたがフォード・トラツクはカシユガルの手前で前スプリングの辨の一つが折れたが之が全行程に於ける唯一の事故であつて一回のパンクさへもなく「支那邊境地方からカシユガルまで走り通した最初の自動車といふ榮譽を主張する事が出来た」のであつた。彼は特に附録として北京(綏遠)——カシユガル間自動車ルート案内を添へてゐる。この旅行は英國政府の公用によつて行はれたものであり單なる冒險旅行ではない。同じ年のはじめにピーター・フレミングとエラ・メイラールによつて行はれた北京より新疆省南方を通過してカシユガルへ出て同じくパミールを越した旅行の方がその點は興味あるものであらう。しかし、彼も亦單なる「役人」ではなく「旅行者」であると此書を讀む者は感じることと思ふ。それは彼が「これまで支那の奥地や邊境を幾千哩となく旅行したことがあつた」といふ經歷からばかりではなく、此書の最後に述べられた數行によつて言ひあらはされてゐる。即ち「本書が私のアジア紀行の白鳥の歌になるのではないか」といふ惜別に耐へないおもひを述べ更に「隊商とさまよへる旅人が中央アジアの一番遠い端から端まで行かうとして往來する。神秘とロマンスの細道が北京、庫倫、

拉薩、喀什噶爾に通じて、遙か地平線の彼方までうねり續いてゐる。中央アジアの魅力に捕はれたことのある旅人にして、再び行くことを願はない者は一人もない。沙漠の旅、砂と埃、それに暑熱と酷寒の不快と單調のことを忘れてしまつて、たゞ、遍歴者を再びアジアの中心へと惹き寄せ、あの不可解な魅力だけが記憶に残るのである」と結んでゐる箇所である。或ひはこの「魅力」が彼をして「旅行者」たらしめたのであらうか。いづれにせよ此書は優れた旅行記として讀者をひきつける。又人々は此書を読んで支那が如何に大きな國であり又複雑な事情を持つ國であるかを知ることであらう。尤も著者は公職のある爲かそれらについて可成り深い書き方をしてゐる。(その頃刊行された幾冊かの旅行記のうちその表題に「Forbidden」の字を用いたものは多々。—「Alone through the Forbidden Land」; «Gur-sav Krist»—«Forbidden Road, Kar-hul to Samarkand»; «Kosia Forbes»—«Forbidden Journey»; «Ella Maillart」等。いづれもこれらの禁制の區域への冒險心と不可解な魅力とが幾人かの孤獨な旅行者を引き寄せたのであつた。)

今この興味ある旅行記が續譯されて容易に人々の手に入るやうになつたことはよろこばしい。神近氏の譯は優れた續譯であるといふ評を受けてゐるが明快で讀易しい。本文の括弧内の文章は同氏のものである。續譯者が「はしがき」中に述べてゐるやうに原書にある寫眞を見られないのは惜しい。殊に我々にとつて冬のパミールの荒涼とした風景は大きな魅力がある。パミールへこそは、旅行者にして死ぬ前に一度この名高い地域アジアの屋根を訪れたいと希はないものがあるだらうかこの著者も述べてゐるのである。(田邊主計)

沙漠の蒙疆路

オーエン・ラテイモア著
滿鐵弘報課 西卷周光譯
朝日新聞社發行
定價 壹圓 三十錢

本譯書は朝日新聞の大體叢書第二卷として出されたもので、原書はラテイモアの「The Desert Road to Turkistan」である。らしい、と書いたのは原書の方がもつと悉しいにも拘らず本書は四六版九頁で二七一頁しかなく而も抄譯である事を一言も斷つてゐないからさうしたのである。如何なる續譯にも神様の仕事でない以上誤謬のある事は免れ得ない。だから私は齒と齒の間に挟まつた様なところに足らぬ、大勢に影響のない誤譯などは別にとり立て、指摘しやうとは思はないがひどいのはその必要があると思ふ。本書四三頁の最後の所に「今は亡き著名の探検家たりしヤングハズバンド、プレバルスキイ、コズロフ、

サー・スタイン等の足跡に觸れる。」とあるのは原書では唯…… touched at different points by such great travellers as……となつてゐるのみである。今は、きとは何處にも書いてないし、ヤングハズバンドもスタインも今日尙立派に生存してゐるのであるから、之は少し許り失禮でもあり書き過ぎでもある。

次に一四四頁終りから三行目にある「エチンゴル河の大峽谷に依つて」の大峽谷は原著では flat valley (一七二頁)となつて居り、且つ前後の關係や他の旅行記或は寫眞等によつても之が大峽谷であるとはどうしても考へられない。谷とも云へない殆んど溝の程度の(之は極端かも知れぬが)此の額濟納河を大峽谷と譯したのでは甚だ以て面白くない。

要するに翻譯に想像(それもいゝ加減な)は禁物である。抄譯が悪いといふのではない、原著をこゝまで抄譯して何の無理もなく讀ませ得るといふ事は確かに譯者の頭が物を云つてゐる。然し原著に忠實でなかつた事は残念である。

登山家に必要な救急處置

浅井東一著四六版一二五頁 昭和十四年三月朋文堂發行 著者より當會宛贈られた、朋文堂

山岳文庫第一一號としての本書を見る。「絶対に事故を起さぬ登山」こそ何物にも優る手當であり、我々の常時忽にすべからざる喫緊の心構でなければならぬが、同時に又一且事故の起つた場合、豫め之れに處する凡その道を辨へて居る事は如何なる登山者に取ても必要な事であり、分てもリーダーの立場にある人達に取ても或る程度此の種の知識を持って居る事は一の義務であるとき考へられる。

是等の要求に答ふるものとして本書は誠に恰好な良書である。言辭明快にして要を得、記述平易簡潔にして駄を省き、よく諸般の山行に關聯あるべき疾病、外傷、故障を網羅して四六版一二五頁の小本に如何にも手際よく纏め上られて居る。評者は醫者ではないので、嚴密な醫學的立場からの正鵠な批判を此處に明にするを得ないが、社會人として且登山人として之れを見るに全内容に涉て我々をして十分納得せしめるものがある。單に醫療的方面の處置のみに留めず、遭難信號から遭難者救助に對する注意、負傷者の運搬方法、更に救出の技術的方法に迄(此の部分だけとしては不完全であるが)多少

とも言及した點、及全項目に涉て明快なペン畫に依る圖解を挿入した事等は特に稱揚せられてよい。其の邊多分に本會々員たる著者の登山體験に基くものがある譯であらう。が、更に一步を進めて、一般遭難

に際しての遭難者自身への注意乃至心構、避難方法、判斷の下し方と言つたもの等、又救助する者の側から見た凡ゆる形態の遭難に對する救出の技術的方法をも残す所なく載録して遭難、救助、醫療處置を通じて全處理方策を包含したものとすれば、本書の效用と聲價は蓋し計り知れぬものがあらう。尙附録(二)衛生材料の項にはA・B・C級位に分た登山家向救急備品雜形目錄等は附加して置て欲しいものであつた。兎もあれ著すに人を得た好個のマウンテンヤーズ、ポケット、ガイドブックと言ひたい。只本書の裝幀は文庫ものとは言へ如何にも感心しない。(青木 昇)

Die Alpen

一九四〇年一月二月號

(スイス山岳會々報)

Marcel Kurz は一九三八年に於けるヒマラヤ遠征の主なるものについて述べてゐる。即ち
一、第七回エベレスト遠征隊
二、埃國遠征隊——ガンゴトリへ
三、パウワー隊のナンガ・バルバト遠征
四、米國K2遠征隊
五、マッシュアブルム遠征隊
而して以上の各遠征隊の行動成果を略述せる後、英米獨等の之等遠征隊に、簡單だが暗示に富んだ批評を與へてゐる。(吉 阪)

夏山情報

本年は山日記の發行が延期となつたので、夏山情報を出るだけ豊富に掲載するべく努力したが、締切までに集まつたものは意外に少く、大體左記の通りである。

- 神河内附近
 - 酒澤小屋 期間六・一八——十一
 - 三(薪の販賣を主とし、萬一の避難小屋に充つ)
 - 燒岳小屋 泊代二・三〇
 - 鳥々——神河内バス代一・五〇
 - 案内料 四・〇〇
 - ボツカ 十貫目五・五〇の割
 - 燕山莊 二食付一泊三・五〇 辨當
 - 四五(季節外八〇 但食事無)
 - 案内料 三・〇〇位
 - 神河内各所 一泊(三・五〇—七・五〇)
 - 德澤園 一泊(三・〇〇—四・五〇)
 - 穂高小屋 泊代(二食付)並一三・〇〇 上—三・六〇 辨當四〇
 - 今夏の期間(七・一〇—二五)
 - 槍肩、殺生、大槍 一泊三・三〇
 - 鳥帽子小屋 一泊三・〇〇
 - 水晶小屋 一泊三・四〇
 - 乗鞍スキー小屋、冷泉小屋 一泊二・七〇
 - 高山線方面バス代 船津——猪谷(一・五〇) 船津——古川(一・〇〇) 船津——上寶(一・五〇)
 - 白鳥——後立山附近
 - 白馬山莊 二食付 一泊四・五〇—一〇・〇〇
 - 頂上小屋 (三・五〇)
 - 村營小屋 (三・五〇—五・〇〇)
 - 大池小屋 鑪温泉(三・五〇)
 - 唐松小屋 キレット小屋(四・五〇)
 - 白馬尻 猿倉小屋(三・三〇)
 - 案内料 一日三〇
 - バス代 昨年と同じ
 - 針ノ木小屋 一泊二・八〇
 - 大澤小屋 一泊二・四〇
 - 諸物價昨年の約二割まし。
 - 案内料(大町)三・〇〇(天暮—三・五〇) 人夫不足なり
 - バス代 大町—大出 二〇
 - 貨切—二・五〇
 - 祖母谷小屋 一泊一・五〇—二・〇〇
 - 清水小屋 一泊一・五〇
 - 黒部案内料 三・〇〇
 - 黒部本流溯行は、樺平より仙人谷迄は可能なるも、それ以南は絶對不可能の由(吉澤庄作氏調)
 - 立山・鋸方面 未だ決定をみざるも、一般に昨年より一割五分乃至二割の値上。
 - 中央アルプス
 - 宮田寶劍・頂上小屋 一泊(二・五〇) 自炊(八〇)
 - 伊那小屋 一泊(二・〇〇) 自炊(七〇)
 - 越百小屋 一泊(二・五〇) 自炊(八〇)
 - 空木小屋 一泊自炊(八〇)
 - 案内料金 三・五〇—四・〇〇
 - 南アルプス
 - 北澤長衛小屋 一泊二・〇〇 自炊八〇 本年は物資販賣せず
 - 案内料 三・五〇—四・〇〇
 - バス代(伊那—黒河内)七〇
 - ハイヤー 高遠—戸臺 十八圓
 - 荒川小屋、廣河原小屋 一泊(自炊)八五(寢具なし)
 - バス代(大馬—落合)一二〇
 - 三伏小屋 一泊八五(寢具なし)
 - 案内料 四・三〇(冬山五割増)
 - 大河原、鹿麩 小遊湯何れも一泊二・〇〇より
 - 甲斐駒六合小屋 一泊(六〇)(但寢具なし)
 - 仙丈小屋 一泊(二・五〇—寢具なし) 自炊(一〇〇)
 - 駒七丈、五合小屋 一泊(二・五〇) 自炊(一〇〇) 薪代五〇
 - 案内料 四・五〇(滞在三・五〇)
 - 冬期五割増
 - バス代 葦崎—裏原五〇 葦崎—柳澤四五 葦崎—横手五〇 葦崎—小武川橋二五



欄部岳山

早大山岳部

今回會報の編輯組織に多少の改革を加へて、學生欄といふ特別な計畫が出来たとの事、大變結構な事誰でもなんでもかんでも書いたら、面白いニュースが聞けることせう。

早稻田大學體育會山岳部でも三十餘名の新人部員を迎へて、第一回の合宿も一週間谷川マチガ澤で過しました。物資缺乏の折から新人にとつて山道具は相當に大なる負擔、心配した靴も、なんとか皆そろつて、其の時になれば目鼻はつくもの、先的事を考へてゐたら何にも出来なくなつてしまふ。今日の新聞には「夏山に惱み、ガソリン難の上高地」と、荷物の大きさから重さ迄限定されたのぢや多人数で十貫に近い様な荷を持つ連中は上高地へ入るにも困難、といつて徳本を越えるのも一寸考へものです。

今夏の合宿計畫は、最初七月十日より十日間潤澤に於いて全員での生

活、次に續けて新人を分けて約一週間から十日間の縦走を各方面に出します。

- (1)穂高―銀岳 (2)上高地―笠岳―双六岳―銀岳 (3)穂高―針ノ木峠―五色原 (4)奥又白生活 (5)横尾本谷生活 (6)南アルプス北部及び南部 (7)中央アルプス (8)後立山連峰 (9)槍ヶ岳―燕岳

八月中で山に於いての合宿を終へ九月になつてから十日間、この二三年來續けて來た、體力養成合宿を東京近郊のグラントに於いて行ひ、都會に於いても大いに體力増進をはかる心算であります。(鈴木正俊)

東京商大山岳部

四月以降の登山と夏の計畫
四月 針ノ木谷大澤小舎生活 四名
(針ノ木、スバリ、赤澤岳登頂)

歡迎登山、岩殿山 廿五名
富士山 四名
三ツ峠岩登り練習 二名
八ヶ岳縦走 一名

(富士見より權現、赤岳、本澤温泉迄)
甲斐駒ヶ岳 三名
奥秩父縦走 四名
富士山 二名

富士山 二名
鹿島館、荒澤奥壁南稜 二名
鹿島館より針ノ木峠へ 三名
穂高小舎生活 七名

六月 (瀧谷第一尾根、クラック尾根、北尾根、ジャンダルム等)

以上従來の方針と異なる所があらません。夏山は道具不足につき、全部員の合宿形式を改め、針ノ木峠より五色ヶ原、薬師、槍に至る幕營による集團縦走を可及的多數部員にて行ひその後、又白池に入つて、前穂高北尾根奥又白側の登攀に努力する豫定であります (大塚 武)

會員通信

ドイツ便り 高木 正孝

久しく御無沙汰して失禮致しました。遙かに皆様の御健康を御祈りします。小生大學の仕事が終り、休みをもらひ、こゝに休養券々日本の方々とスキーに來ました。一月、日獨學生會議のあつた所で、仲間もその連中です。天候が悪いのですが、明日日から Innsbruck の友と Ötztal-Alpen 2 Gletscher-Tour に行くつもりです。

こゝは Stubai-Alpen の北はづれ、この繪の様に(繪葉書のこと)一軒の家と、まわりに三〇〇〇米級の小さいながらも氷河のある Torm は手ごろな山をもつ有名なスキー場です。

(三月廿八日、インスブルックにて)

北支便り 渡邊 公平

蒙張のはてにゐると櫻葉の花くら

みしか、花らしい花を見ませんが、流石に八達嶺を越えて北京に來るといふんな花が咲くので驚いてゐます。桃?は既に散つて、榆葉梅が何處へ行つても花盛り、遠くから見ると八重櫻のやうでもあり、また梅の咲きつ振りにも似てゐる淡紅色の艶麗な花は、北京の街や萬壽山、郊外到處行人の眼を惹いてゐます。

この花について丁香(ライラック)海棠などが、甘ずつばい芳香を散らし乍ら、つゝましかかに咲いて居ります。

西直門から西郊に出ると、之等の花や三寸ばかりものびた眼のさめる様な青い麥を前景にして、北京人から西山と呼ばれる大行山脈が、或る時は淡いセピア色に霞み、或る時は紫紺に冴えて、ちよつと支那に來てゐるといふ様な感じを忘れさせます。八達嶺から南に續く大行山脈の稜線は、故國の立派な山から久しく遠去かつてゐる小生には、偉く美しく、高く見えます。支稜の末端にある萬壽山や玉泉山では、子供、女のハイカーならとに角、大の男には少々物足りなさ過ぎませう。將來北京のハイカーや登山家は、大行山脈主稜に足を伸ばすべきでせう。今は未だ共匪出沒して駄目らしいが。

小生は毎朝毎夕、燕京八景の一なるこの西山の風景を見乍ら暮らして居るわけで、甚だ恵れて居ります。

(四月十一日)

南支便り 松山 武貞

前略 筆無精の小生、ついついと大變に永らく御無沙汰してゐます。ピッケルもつ手に鈍とりて、エクスペディションならず、聖戦にかりてより、早や八ヶ月餘り、小生相變らずファイテンング・スピリットで頑張つてゐます。

雪、氷に馴れた小生、今は南方十字星輝く南支〇〇で、工兵特有の任務に勇躍御奉公致してをります。

こちらは今、三月四月は兩期で、じゃんくくと雨が降つてゐます。湿度は一〇〇に近く、屋内はじめじめして洗濯物がかわかず、すべての物にかびが生えてきます。大陸的の氣候にて太陽が出ればものすごく暑く夜は雪のやうな霜ががびつしよりと降ります。將來大陸遠征特に南方の場合、大陸性氣候といふ事に研究すべき所が多々有る様に思はれます。又暑さ、ヒマラヤに行くにさへ熱帯を通過せねばならぬ吾等は、暑さに對する研究が非常に必要であると感ぜられます。吾等の今までの暑さと云ふ觀念を、見事に吹き飛ばした温度です。

會員諸兄の健康を祈ります。

{ } { }



會務報告

六月定例理事會報告

六月十一日(火) 午後六時三十分
於虎ノ門事務所

出席者 高頭、武田、島山、楳、
藤島、角田、吉澤、茨木、中司

一、社團法人の件

一、「山岳」三十五年第二號は十月乃
至十一月發行の豫定。

一、會報編輯報告。

一、山日記の件

十一月下旬發行の豫定。

一、京濱山岳聯合の件

一、登山用具の資材配給を受けるに
付厚生省の意向打診のこと。

一、新入會員左の通り承認せらる。

山賀榮一、關戸順吉、山崎安治、

佐野和男、井上篤治郎、方炫、船

戸節夫、中元銀弘

第九十五回小集會 (關西)

昭和十五年五月十四日 於清交社

一、スイス雜談 藤島敏男氏

世間も山岳界も何だか割り切れな
く落ちつかない気分にある時、こう
して遠いスイスの山の話の聞くのは

心のどこかを慰められるやうで、安
易な氣持を以てお話が何へ、非常に
のびやかな集りであつた。

お話の前に氏自身寫してこられた
アルプスの美しい寫眞を多數拜見さ
して頂き、山戀ひの心を呼び起しま
だ見ぬスイスアルプスへの憧れを強
く感じさせられた。お話は氏が昭和
十年から十三年にかけてオーバラン
ド、エンガディン、ワリス等スイス

の山旅に出かけられた時の順に従ひ
山の様子、日本アルプスとの比較、
登山者の態度、山小屋内の出来事、
山村の景觀と雰圍氣或ひはスキー學
校風景といふやうなものに就いて。

美しい自由詩をよむやうな淡々とし
たお話であつたので宛かもスイスの
山麓に在つて何ふが如きいゝ氣持に
なつてしまつふ。又最近における山
案内料やどの位の費用を要するもの
かなど一寸想像だけでは見當のつか
ないお話もつけ加へて頂き參考とな
つた。

久し振りの小集會であつたが當日
は丁度山の集りが外に三組もあり出
席されない人のあつたのは惜しい事
と思つた。參會者十七名(富田記)

第九十六回小集會

第九十六回小集會は都下學校山岳

部の最近の收穫に就いて講演を願ふ
こととし、五月二十三日午後六時半
より日本橋日本商工俱樂部に於て開
催した。二十八度にも昇つた晝間の
暑さであつたが、ビルの四階の窓か

郎、以上二九名、會員外四二名。

ら吹き込む涼しい夜風に當りながら
スリルを含んだ潑刺たる話を聞くこ
との出来たのは幸であつた。最初に
早大の關根吉郎氏は「明神岳東稜に
於ける一つの試み」と題して、本奉
この目的に對して展開された同學山
岳部の総合的有機的行動に就て語ら
れ、それを中心として過去及び將來
に於ける學校山岳部の有り方と言つ
たものに對する見解を示された。次
で東商大の大塚武氏は「北穂高瀧谷」
の題下に同じく學生登山者としての
眞摯な内省、及び態度に就いて示唆
多きものを披瀝され、今冬試みられ
た瀧谷第四尾根の登攀を極めて印象
的な言葉で語られた。終つて兩氏の
持參された寫眞を幻燈に映して感銘
を加へ、十時少し前散會した。時間
がなくて討論を充分に盡すことの出
來なかつたことは遺憾であつたが、
兩氏の講話には我が登山界、乃至日
本山岳會の將來に就て示唆する多く
の問題を含んでゐた。當日來會者七
十一名、特に學生諸氏の多いことが
目立つた。(石原記)

出席者左記の通り
吉田竹志、木村鏡吉、堀田彌一、大
熊保夫、土屋鎮雄、茨木猪之吉、佐
藤誠次郎、宮崎二郎、角田吉夫、額
田敏、田邊主計、佐藤貞吉、寺澤一
磨、黒田正夫、酒井忠一、藤岡健藏
西岡俊雄、藤野關夫、崎田照、石原
巖、黒田孝雄、横有恒、浦松佐美太
郎、三田幸夫、關根吉郎、五十嵐清
三郎、鈴木正俊、望月達夫、吉澤一

昭和十五年七月五日印刷
昭和十五年七月十日發行

東京市杉並區馬橋二ノ二四〇
編輯者 望月達夫
東京市目黒區中目黒一ノ七四二
發行者 塚本繁松
東京市芝區榮平町一(不二屋ビル)
發行所 日本山岳會
電話芝(四三)一六四九
振替東京四八二九
東京市芝區濱松町一丁目十三番地
印刷者 植田庄助
印刷所 成文堂印刷所

ニシヤジツの
専門店
片相
レント店

本邦天幕製
作業之嚆矢
各學校山岳
部指定製作

東京市神田區神保町三ノ一
電話九段(三三)三二一〇